

## 長井博士の麦酒会

薬学雑誌 224号 1073頁, 1900(明治33年)  
東京地区通信欄

例年のごとく10月6日青山の邸内にて開かれた。招待者は大学、陸海軍、衛生試験所の学士、技術官および屈指の実業家等、無慮六十余名。邸園内は色旗紅燈を以って飾られ、樹下に恵比寿ビール数樽を開き、会衆随意の快飲に任せ、(略)。

2時を告ぐるや丹波博士、高橋(秀松)学士の指揮により運動に着手せり。長井氏らの徒歩競争に始まり、戴囊競争、一脚競争、提灯競争、スプーン、盲旗、徒歩2回競争、二人三脚、盲球、障害物、綱引き…。半白頭、洋燈(ランプ)頭の博士学士連に至るまで一人も余さず競争をなし、あるいは徒走

中途にして転倒、泥濘に「ツボン」を汚し(まだ袴が多い時代の貴重な洋服)、あるいは半途提灯の火を消し失望背走するものあり。(略)

4時頃遊技終了するや賞品を笑声の裡に授与、洋食の饗応あり。散会せしは点燈の頃にて折しも雨脚霏霏として濡れ鼠の如くなりしものありしはこれのみ遺憾なり。

なお、入賞賞品にはタイトルがついていた。「危篤の病人」は牛脂が1升(九死一生、受賞者は山田董)、「最も需要多きろ過器」は味噌こし(慶松勝左衛門)、「盲人の金貸し」は氷砂糖(高利座頭、中村瀧次郎)、「妻君なき人」はイチジク(無花果、むかか、長井氏子息アレキサン)、「頼山陽の名吟」は芫青(ゲンセイ:カンタリジン含む生薬)を36個(=4×9)(鞭声肅々…、近藤平三郎)、「新しい空気」は新しい茶碗と箸(食ふ器、丹波敬三)、これくらいでやめる。このとき長井先生は55才。屋敷地は9,000坪あった。 小林 力